瑞山会会報

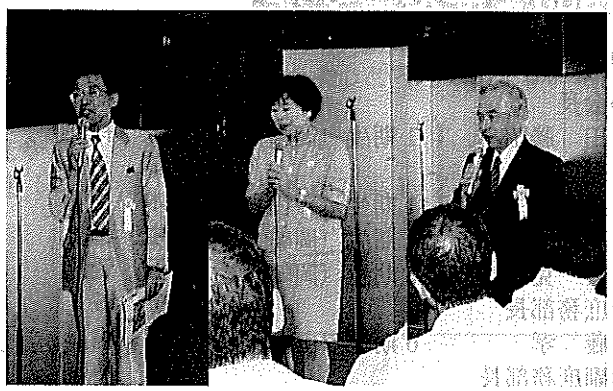
第32号

平成11年12月10日発行

編集発行／名古屋市立大学経済学部同窓会・瑞山会編集部
名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１（名古屋市立大学経済学部内）

平成11年度　瑞山会通常総会開催

通常総会風景



左から塩見、青山、榊原の各先生

平成11年８月21日（土）午後４時より平成11年度通常総会・代議員会が名駅前頤和園豊田ビル本店にて開催されました。開会の挨拶、物故者の黙祷の後、議長・書記選出が行われました。続いて前田会長の挨拶、平成10年度瑞山会活動報告、坂野会計部長より決算・予算報告が行われ、更に松原監事より監査報告がなされました。質疑応答のあと拍手による賛成多数で承認され総会・代議員会は終了しました。
ついで懇親会に移り塩見経済学部長、青山後援会会長、榊原薬友会会長代理の方々からご挨拶があり、安藤経済学部教授の発声により乾杯が行われました。会は和やかな雰囲気で進み午後７時終了となりました。

●平成10年度決算報告

第21期　貸借対照表

（平成11年３月31日現在）　（単位　円）

借　方	金　額	貸　方	金　額
普通預金・現金	2,373,611	運営基金積立金 （うち当期積立金）	16,800,797 (1,437,962)
中国ファンド	5,932,464		
貸付信託	6,560,000		
金銭信託	1,934,722		
合計	16,800,797	合計	16,800,797

第21期　収支計算表

（自　平成10年４月１日　至　平成11年３月31日）

（収入の部）　（単位　円）

勘定科目	予算額(A)	実績額(B)	差額(B)−(A)	
会費収入 （新入会費）	4,220,000	4,220,000	0	(注２) (注１)
各部預金利息	6,000	3,999	△2,001	
運営基金利息	74,000	56,116	△14,884	
名簿売上	0	32,000	32,000	
収入計	4,300,000	4,315,115	15,115	(注３)

（支出の部）　（単位　円）

勘定科目	予算額(A)	実績額(B)	差額(B)−(A)
名簿追録発行費	50,000	26,481	△23,519
会報発行費	1,500,000	1,442,338	△57,662
総会費	1,000,000	81,149	△918,851
事務費	300,000	231,484	△68,516
通信費	60,000	127,506	67,506
事業運営費	1,010,000	693,195	△316,805
日中学術交流		275,000	275,000
予備費	300,000	0	△300,000
支出計	4,220,000	2,877,153	△1,342,847
当期剰余金	0	1,437,962	1,437,962
合計	4,220,000	4,315,115	95,115

（注）名簿追録発行費…新卒業生に対して、８月に郵送

●平成11年度予算案

第22期　収支計算表

（自　平成11年４月１日　至　平成12年３月31日）

（収入の部）　（単位　円）

勘定科目	予算額(A)	実績額(B)	差額(B)−(A)
会費収入 （新入会費）	4,220,000	4,220,000	0
各部預金利息	5,000	3,999	1,001
運営基金利息	70,000	56,116	10,884
その他	0	32,000	△32,000
収入計	4,295,000	4,315,115	△20,115

（注）新入会費は平成11年４月入金確認分

（支出の部）　（単位　円）

勘定科目	予算額(A)	実績額(B)	差額(B)−(A)
名簿追録発行費	50,000	26,481	△23,519
会報発行費	1,500,000	1,442,338	△57,662
総会費	500,000	81,149	△418,851
事務費	300,000	231,484	△68,516
通信費	100,000	127,506	27,506
事業運営費	1,000,000	693,195	△306,805
市立大学50周年記念積立金	300,000		△300,000
日中学術交流	0	275,000	275,000
予備費	545,000	0	△545,000
当期剰余金	0	1,437,962	1,437,962
支出計	4,295,000	4,315,115	20,115

（注１）新卒業生に対する名簿追録発行費用
（注２）会報２回発行費用
（注３）新規各種助成費
・新支部補助金
・ＯＢ表彰制度　　等を考えています。

1999年度役員名簿

理事

●会長
前田　勝昭　　１期生（岡崎）
●副会長
近藤　常夫　　１期生（平田）
多和田　眞　　４期生（岡崎）
佐藤　克己　　８期生（岡崎）
●庶務部長
伊藤　孝　　６期生（山本）
●副庶務部長
渡辺　尚泰　　３期生（柴田）
●庶務部
浅井　和良　　１期生（静田）
八木　得三　　５期生（山本）
小笠原　幸生　　６期生（中居）
荒深　美和子　　９期生（木村）
倉地　弘美　　14期生（松永）
木村　剛　　17期生（辻）
吉田　和男　　20期生（國村）
●編集部長
榊原　茂　　１期生（松永）
●副編集部長
服部　篤典　　18期生（安藤）
●編集部
手塚　祥郎　　１期生（牛嶋）
伊藤　幸雄　　５期生（妙見）
鈴木　正彦　　７期生（芝原）
田中　喜夫　　７期生（岡崎）
寺沢　賢治　　11期生（牛嶋）
水野　誠　　13期生（宮川）
松川　倫典　　16期生（塩見）
湯浅　伸庸　　18期生（安藤）
中村　英利　　20期生（西田）
石川　勇治　　21期生（上村）
柴田　光晴　　22期生（神山）
家田　嘉人　　26期生（星野）
高山　浩之　　26期生（國村）
西理　恵　　26期生（國村）
清水　綾子　　30期生（多和田）
杣田　明子　　30期生（安藤）
●事業部長
逸見　和弘　　１期生（松永）
●副事業部長
杉浦　晴義　　５期生（松永）
●事業部
都島　忠比古　　３期生（山本）
浅岡　邦康　　３期生（傍島）
木村　新作　　５期生（岩橋）
伊藤　政明　　５期生（柴田）
岡田　美津雄　　10期生（中居）
村岡　範久　　15期生（松井）
畔柳　一　　19期生（星野）
石川　常彦　　23期生（國村）
●名簿部長
中村　正治　　５期生（木村）
●副名簿部長
児島　完二　　22期生（妙見）
橋本　光生　　18期生（醍醐）
●会計部長
坂野　修　　２期生（山本）
●副会計部長
児島　和世　　22期生（國村）

監事

粟野　泰次　　１期生（大山）
松原　隆二　　４期生（中居）

！バーベキューの集い開催！

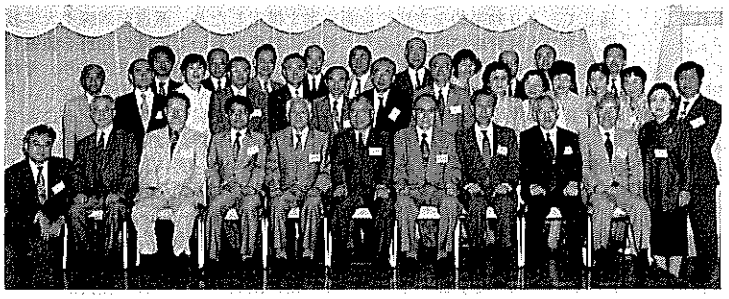
経済・医学・薬学三学部同窓会合同主催によるバーベキューの集いが、９月５日（日）に名市大山の畑キャンパスで開催されました。晴天の元、家族連れを含め約40名の会員が参加しました。９月といえどまだまだ夏の気配が濃いキャンパスはあちらこちらで蟬が鳴き子供たちは蟬取りに熱中したり、大人たちはビール片手に歓談が続きおおいに盛り上がりました。

学部の枠を超えて全名市大同窓会会員どうしで参加していただきたいと思います。

お腹も満腹みんなで記念撮影

＜　ＯＢ投稿コーナー　＞

平成11年度薬友会関東支部総会・懇親会に出席して



７月11日（日）東京中野、中野サンプラザにおいて名市大薬友会関東支部総会および懇親会が開催されました。開催の約一ヵ月前に瑞山会前田会長よりお電話を頂き、以前会長に経済学部の関東在住ＯＢが集う場所として瑞山会関東支部設立のお話しをしたこともあり、会長より薬友会関東支部総会・懇親会に出席すれば設立への手がかりが得られるであろうとのアドバイスを頂きました。日野薬友会関東支部長、伊藤副支部長（事務局長）からもお誘いの電話を頂き、開催当日は来賓としてスピーチを求められました。会場で来賓の渡辺薬学部長、柳沢芸術工学部長始め関東在住の薬学部ＯＢ皆様のお話しをお伺いし笑顔を拝見していますと、私たち経済学部ＯＢにとっても大学時代の思いでの場、心の拠り所として集い憩える場、そんな瑞山会関東支部設立の必要性をしみじみ感じ、その思いをスピーチに代えお話しした次第です。瑞山会の楽しみは事業部主催のバーベキュー大会、お花見、ゴルフコンペ、テニス大会等ですが、瑞山会関東支部の催しには釣り大会、山歩き等も加えたいと考えています。逸見事業部長にご指導頂きながらできることからひとつづつ始めようと考えています。瑞山会関東支部設立有志の皆様のお電話・FAXをお待ちしています。

◆関東支部設立のための連絡先◆

前田　進（４期生）　千葉県松戸市六実１-２-３-15
電話・FAX 047-388-0543

事業部だより

平成11年９月５日バーベキューパーティーが行われました。昨年に引き続き山の畑キャンパス内にて開催しました。快晴で暑いばかりの陽気に恵まれ楽しいひとときを過ごすことができました。目玉のうなぎの蒲焼きが好評でビールのつまみにしたりうなぎ丼にしたりと大人気でした。10月23日には第34回ＯＢゴルフコンペが四日市ＣＣにて行われました。昨年のこのコンペは台風に見舞われ大変でしたが、今年は雲一つない秋空で絶好のコンディションでした。優勝は第33回大会に続いて伊藤博文氏（２期生）の連続優勝でした。準優勝は櫻井利勝氏（１期生）でした。次回は来年４月中旬の土曜日か日曜日に三重県のゴルフ場を予定しています。また来年４月２日には山崎川花見散策と茶会を行う予定です。お茶のほかジュースやビールも用意していますので、ご家族やお友達をお誘いの上お気軽にお出かけ下さい。久しぶりに見る山崎川の桜も良いものだと思います。５月３日には第11回硬式テニスの会を開催する予定です。過去の参加者には別途ご案内しますが、初参加となる方は事業部宛お知らせください。

（事業部長　逸見和弘　052-914-6221　E-mail hem3@mvj-biglobe.ne.jp）

新しい時代を創る人と人とをつなぐ

ネオ・キャリア・ネットワーク　Vol.7

中野　武さん［第４期生・中居ゼミ］　国際協力事業団［ＪＩＣＡ］国際協力総合研修所　客員専門員

編集部[□]中野さんは、28年間も国際協力という事業に関わっておられますね。

中　野[●]私は、'49年生まれ。典型的な団塊の世代で、今年50歳。長女は結婚して孫娘が２人。次女は学生です。私が千種高校から受験した当時、名古屋市立大学は猛烈な倍率でした。'71年に卒業し、「開発途上国の人々と仕事を通じて、のんびりつき合いたい」という思いから、ＪＩＣＡの前身である海外技術協力事業団に入りました。その頃の牧歌的な雰囲気から見ると、現在のＪＩＣＡは、隔世の感があります。'74年、ＯＤＡ[政府開発援助]の充実を目的にＪＩＣＡに改組。現在、世界の援助市場は約５兆円規模に成長、うち日本のＯＤＡ支出額は20％以上を占め、'91年以来、世界第１位です。ＪＩＣＡは創立25周年、「顔の見える援助」の中心的な担い手として、今では世界約150ヵ国に協力活動を展開、55ヵ国に事務所、職員数も1200人を越える組織になりました。入団後、名古屋の国際研修センターや人事課を経て、'77年、28歳の時にアメリカ留学。コロラド大学経済研究所やピッツバーグ大学大学院で、「開発経済学」「援助政策」「プロジェクトマネジメント」等を学びました。ハードな学習環境で、英文科卒の妻に助けられての卒業。仲間から「秘書付き留学」と羨ましがられました。'79年に帰国後、企画部に配属。研究協力の促進や援助プロジェクトの評価、技術協力の政策分析等を担当。'83年、初の海外赴任。ケニアのジョモ・ケニヤッタ農工大学で２学部６学科を同時開校するという巨大プロジェクトのアシスタント・チームリーダーとして、計画策定から運営管理、大学運営理事会委員として、アフリカ開発の中核となる技術者の育成に取り組みました。'92年、パリの経済協力開発機構[ＯＥＣＤ]に開発協力局援助政策審査部長として出向した時は、欧米先進国のＯＤＡの実質的な効果を、質、量、政策の面から審査する仕事で、各国の援助の実態を知る貴重な機会を得ました。それまでの約50ヵ国の途上国の現場体験を活かして、支援する国が「どれだけ出したか」の金額統計ではなく、支援される国の自立に対して「どれだけ貢献できたか」を評価する視点の大切さを力説。私が出版を開始した各国別「援助政策審査シリーズ」は、援助政策や実態の透明性を高め、より有効な支援策の吟味・討論が目的でしたが、カナダやフランスのレポートがＯＥＣＤ出版物のベストセラーにもなり、高く評価されました。ＯＥＣＤでは、部長の下に職員が15人位というフラットな組織でしたが、個人でもチームでも、実力主義を実感しながら仕事に集中でき、大変刺激になりました。'97年帰国、企画部次長としてＪＩＣＡ全体の事業計画の企画立案、先進国政府国際機関との援助協調や連帯活動を推進。名古屋大学大学院の国際開発研究科では「転換期の日本の国際協力」について講義やワークショップを担当。現在は、国際協力客員専門員として、開発政策、支援行政の研究、国際協力懸案事項の調査を進めながら、技術協力専門家や青年海外協力隊員の派遣前訓練やセミナーを実施。'99年春から、拓殖大学政経学部や専修大学経済学部、東京大学大学院の新領域創成科学研究科で「環境と開発の国際協力」「アフリカ開発」「技術支援」等の分野の講義や演習指導などを行っています。私は、これまで、組織全般の総務、経理、人事から、プロジェクト管理、事業・官房部門の管理職まで、国内勤務と海外のローテーションの中でほとんど経験しました。ＪＩＣＡの人事政策は、発足当初から、国際社会に通用する組織人としてバランスのとれた「ゼネラリスト育成」が中心でしたが、今の時代は、実効性の高い国際協力プロジェクトを企画立案し、現地の情勢に合わせて的確に推進できる能力と専門性へのニーズが高くなっています。私は、アメリカで学際的な研究を通して疑問を論理的に解明したいという志向が強くなり「勉強する開発実務者」を目指すようになりました。

□国際協力も、これまでのような、支出額、物資量、派遣人数という量的な尺度ではなく、支援される国の目的、対象、環境に合わせた的確で実効性のある方法の企画立案という、プログラムオリエンテッドな取り組みが重視されるようになっていますね。

●まさにその通りですね。支援する側の意欲や能力と、支援される側の意識や努力やしくみがうまく共働しないと、自立的、持続的な効果は生まれません。きめ細かな支援プログラムの工夫が大切です。私たちのような政府機関が、ＮＧＯ[非政府組織]と積極的に連携しているのは、彼らが、現場のニーズや、「そこに生きる人々にとっての自立支援とは何か」を考え続けていて、小規模でも優れたプログラムを創り出しているからです。今は、インターネットで、政府機関、ＮＧＯ、地方自治体、研究機関などが必要な知識情報を求めて国際的にコミュニケーションできる時代。「あの国の開発の優先分野と実態は？」とか、「世界銀行の見解は？」など、問題解決のための討論のネットワークが、距離と時間を克服してインターネット上に急速に展開しています。今後ともネット社会は、市民生活に様々な選択肢と広範な参加連帯の機会を提供、多くの成果を生むはずです。今年ノーベル平和賞を受けた「国境なき医師団」もＪＩＣＡも、ホームページを持っています。開発途上国版「地球の歩き方」としても、よく活用されるサイトになっています。日本には、「顔の見える支援」の有効な担い手として、日本青年海外協力隊員がいます。政府の支援する活動でありながら、自発的社会貢献の気風をたたえる、現場の困難さを直視しつつも、理想を忘れず技術や専門的知見を生かしながら、地道でも活動を続けている若者たちです。私が、国際協力の実態調査や研究を通じて、より効果的な支援の企画立案を模索したり、派遣前訓練や大学教育の中で人材育成に関わるのも、若者に現場において有効な知恵を装備して欲しいからです。国際協力の分野には、現場に強い実務家であり、それでいて知恵者のスペシャリストが必要です。ＪＩＣＡは３Ｊ（ＪＡＬ、ＪＥＴＲＯ、ＪＩＣＡ）と呼ばれ、性差なく実力の発揮できるということで、特に女性の就職先として人気が高いようです。職員数は限られていますが、国際協力活動に参加できるＪＩＣＡプログラムは、実に豊富です。ホームページをご覧下さい。青年海外協力隊、ジュニア専門員制度、シニアボランティア制度、参加団体との連携や補助、大学等への研究委託など、様々な能力をお持ちの人や組織が、その人らしく、できることから、柔軟に参加していただければ幸いです。私まで、お気軽に、ご連絡ください。

□「自立に対する貢献」というのは大変に困難な事ですね。支援が与えるものであるなら、与えれる側には「依存」が生まれ、「自立」は遠のきます。

●ですから、支援を必要としなくなることが「目的」だということを忘れてはいけません。「魚を与えるのではなく、魚の釣る道具を与え、釣り方を教える」という考え方です。援助は「弱者保護」という考え方から脱却しつつあります。「自立を目的とした支援」を考えると、「援助される側＝弱者」という固定概念にはズレや矛盾が出てきます。現在の障害者や老人を巡る問題も、「保護」「隔離」から、自助努力を通じた「社会参加」「共生」へと転換しています。「弱者」を特定して、その対象を保護するよりも、「弱者」を生み出す原因や構造を解明して、現在の「弱者」が伸びのびと自助努力して「弱者」でなくなるバリアフリーな環境を、いかに改善・整備できるかが大切です。日本も、かつて終戦直後には、経済も生活も困窮を極め、アメリカのＮＧＯや国連機関から食料や医療品の支援を受けるスタートでした。しかし、'54年には、国内に多くの問題を抱えながらも国際協力を始めるまでに復興しました。日本の自立的で持続的な成長を可能にした環境、条件は、成長志向で効率的な政府、市場経済の成熟、資本や技術の蓄積、高い教育水準、伝統社会・文化の尊重などです。アジアやアフリカで、支援計画がうまく機能した国家や地域は、程度の差こそあれ、これらの環境・条件が整っていたと言えます。市民の支持、批判のない非民主的な政府・国家や、市場経済が成立していない地域で、自立支援型の協力を展開するのは困難です。

□かつて日本のＯＤＡが、日本企業の海外進出を促すためのひも付き支援だと、マスコミの批判報道もありました。ＮＧＯ[非政府組織]が善で、ＯＤＡ[政府開発支援]が悪のような図式でした。また、日本のアフリカ支援は、日本が国連の常任理事国入りのためのアフリカの約50票の獲得が目的だという批判もあります。

●政府間の国際協力の歴史は、常にその時代の国益と不可分でした。外交カードの一部という現実や、援助国側の事情も反映しています。日本の援助は、戦後のアジアへの賠償問題からスタート。経済成長政策の中で、加工貿易国として自立するために輸出市場の開拓や、鉱物・石油資源保有国との友好促進のための援助もありました。高度成長の'80年代には、アジアに対する政府支援、民間直接投資、相互貿易の拡大が三位一体で回り始め、アジアへの投資が貿易をさらに拡大し、日本の好景気とＯＤＡの拡充、支援の成果が重なる時期でした。今や日本がＯＤＡ世界第１位の地位を占めるようになり、量的な「トップドナー」から指導的な「リーディングドナー」としての役割が求められています。しかし、それも経済が好調でなければ長くは続かず、今、長期不況の中で、ＯＤＡ支出を削減する論議も出てきています。こうした政府支援の減少とは裏腹に、世界全体の民間投資資金は約30兆円の規模にまで拡大。しかしそのほとんどが、アジアやラテンアメリカへの直接投資で、アフリカは市場から見放されています。国際協力は、政治的、軍事的に見ると、冷戦構造下でのテリトリーの拡大に利用される面もありました。ですから、冷戦構造が崩壊した現在、国際協力

の目的は「自立支援」にあり、「平和の配当」を利用して、積極的に進めなければならない」ということが、ストレートに議論できる、またとない国際環境であると言えます。人口爆発、貧困、飢餓、戦争、難民、環境破壊、ＡＩＤＳ、地雷などの問題について、地球全体の規模で、政府と民間、組織と個人が協力して取り組むようなことは、かつてどの時代にもありませんでした。

□20世紀を象徴する大変に深刻な問題群に囲まれていますが、問題解決の糸口や兆しはあるのですか。国際協力の現実や、今日的な成果など教えて下さい。

●60年代、工業化、都市化を柱とする経済成長至上主義が支配した時代には、国が発展すれば、国民すべてに、その恩恵や豊かさが行き渡るという仮説が信じられていました。しかし現実には、国内での貧困が改善されないままに所得格差が拡大し、環境破壊や都市のスラム化だけは、先進国以上という開発途上国が増えました。'70年代は雇用、貧困、所得分配問題が注目され、人間の基礎生活水準を満たすための財やサービスを提供する援助が行われましたが、これも自立支援を促すには至りませんでした。'80年代は、中南米やアフリカの開発途上諸国政府の多くが債務危機で財政破綻し、生活物資の輸入にもこと欠く中、東アジア、東南アジアだけが、国際分業による工業化と自由市場への接続によって、「東アジアの奇蹟」と呼ばれる持続的な経済成長を果たし賞賛されました。しかし、そのアジアも'87年の金融危機を発端にした国家危機を迎え、混沌の中にあります。アフリカ地域の'80年代は、生活水準は大きく後退し、「失われた10年」と呼ばれる程です。植民地独立の'50―'60年代は「アフリカ発展楽観論・アジア開発悲観論」が欧米の主流でした。アフリカは資源も豊富で、人口規模もアジアより小さく、植民地経営の遺産もあり、欧米からの継続的な支援も期待できると考えられました。しかし現実には、人口増加、負の遺産、内戦、環境破壊、飢餓が深刻さの拡大。援助している旧宗主国の欧州各国が、支援の効力感を持てないままに、自信を失い援助疲れに陥っていきました。現在、21世紀の入り口にあっても、日々の生存が危うい「絶対的貧困」の人々は、アフリカでは約３億人、世界全体では12億人以上。旱魃による飢饉もありますが、長期化する内戦、産業の衰退、地域の共同体の破壊で、全てを喪失した人々が難民化するという、人為的原因との複合による貧困や危機が後をたちません。しかし、この地域の人口は減らない。むしろ増えています。

□家族計画に対する知識不足や、避妊のツールが行き渡らないためですか？

●違います。共同体が破壊され、雇用や自営の機会もない貧困な人達には、自分の子供だけが自分のために働いてくれる労働力＝財産であり、将来の唯一の保証です。保険・医療サービスによって長くなった自分の老後を、子供に頼るしか他に方法が無いわけです。彼らは、無知からではなく、自らの意志と日々の現実から判断して、乳幼児の死亡率も考慮して、６人も7人も子供を産むのです。人口増加は、貧困、環境破壊へと連鎖していきます。今後、貧困状況が改善されれば、出生率は低下するでしょう。台湾や韓国もそうでした。日本や欧米先進国は、逆に、今、急速な人口減少の危機に直面しています。その一方で、この10月に国連人口計画［ＵＮＦＰＡ］は世界人口60億人突破を発表。依然として人口増加は続いています。人はどこに生まれるか自分では決められません。今、一番気の毒な運命なのは、偶然にも「途上国の農村に女の子に生まれる人」です。女子は、家事を強制され、女性が財産所有ができない法制度の中で、教育や医療の機会も与えられません。男女差別、間引きとか虐待とか、民族紛争に関連してアムネスティーが動くような人権問題も発生しています。最近は、支援プログラムの対象が、その国や地域という単位から、より身近かな共同体、団体、個人に移ってきました。援助目的が「自立支援」を重視しているので、個人や組織、共同体の自立単位を育成、支援していくことが不可欠だからです。ただ、未だに、開発途上国の政治家には、工業化や開発第一主義の人も多いのが現実です。援助は善意による「おせっかい」という面もあり、地球市民の「普遍的共通価値の追求」と「内政干渉」との区別は難しいのです。

□かつて国際協力が、政府間、男性、政治経済の領域の問題としてあったのに、今や新たな価値基準に転換していくような予感がありませんか？

●「女性の影響力」と「南南協力」は、象徴的な事例ですね。世界的に見ても、女性の視点から見た「開発協力」への批判が、個々のプログラムの改善に活かされ始めています。その観点で人口問題を見ると、「自分が産む子供の数を、自分の意志で決定できない女性の現状」に行きつきます。'90年代に入って、女性たちが、「怠け者で威張っていて、お金ができたらギャンブル」という男性に対して、「生活向上の役立たない男たちをあてにしない。家族計画、貧困解消、産業開発、環境保全の担い手は私たち女性だ」と主張を始めたのです。政府や国際機関、民間部門、ＮＧＯの壁を超えて、援助する側、される側で、国際協力事業に対する「女性の活躍」が急速に高まっています。女性は、家事や子育て、水汲み、薪拾い、農作業、物売りなど、実質的な賃金不払いの重労働を強制される。貧困状況における家事労働は水汲み一つとっても過酷です。こうした実態を改善せずに、資金や物資を政府単位で投入しても、「自立支援」は達成しない。「女性にいかに知識を与え、能力と機会を与えるか」が、開発支援を効果的に推進するための構造上の重要なハブになる。つまり「人口問題の解決」「家族の価値観の変化」「共同体の再生」「持続成長可能な産業振興」など、いずれも女性の自決権、地位向上と密接に関わっているのです。具体的には、母子保健制度を充実させ、子供や家族の育成を支援。不払いの重労働から女性を解放する水道、トイレ、熱効率の良いかまど普及するプログラム等。これは自然資源、森林の保全などに繋がります。「貧困状況の女性に、いかに現金収入手段を確保し、活動を持続させていくか」。家畜の飼育による現金収入の確保。伝統工芸品を作り先進国に輸出する事業システムの確立なども有効です。「読み・書き・計算」を訓練することを始め、教育も衛星放送やインターネットなど、普及した通信技術により「おしん」を放映し、女性の自立、女性主導型の開発モデルを啓蒙する試みもあります。もう一つの象徴的な動きは、「南南協力」です。これは、開発途上国の国民同士が、自立を支援し合うプログラムです。必ずしも政府主導ではなく、国際機関、世界各国のＮＧＯの柔軟な連携が光ります。欧米先進国は、未だこの方法への有効性に懐疑的ですが、日本は「南南協力」に対して、積極的に資金援助しています。インドネシアがタンザニアに稲作技術を支援する活動や、ケニア人大学生をタイが育成するプログラムなどです。韓国にＫＯＩＣＡ、タイにＴＩＣＡなど、ＪＩＣＡのような援助機関が発足しています。こうした「南南協力」モデルは、開発途上国の伝統的な文化や制度を、西洋近代化モデルに置き換えていく欧米各国のアプローチとは違う試みです。その地域や風土が歴史的に培ってきたしくみを利用して、たとえ規模は小さくてもきめ細かで有効なプログラムを重ねていくことで、仲間の連帯や共同体を活性化し、自立的な力を相互に喚起していくことが可能です。女性の意思や主権の尊重、「南南協力」による相互支援は、21世紀に希望をつなぐ国際協力の新しい潮流です。私も研究者として、こうした新しい試みの成功体験を事例情報、教訓として抽出し、アジア・アフリカ協力のみならず、他の地域や共同体への再活用の可能性を考えています。総合的な共感を伴う支援プログラムこそが、大きな成果を生み出すのです。

□そういえば、キルギスの日本人人質事件も、国際協力事業団［ＪＩＣＡ］に関わる技術者の方々でした。

●スタッフの安全は最も大切な問題の一つで、キルギスでも、全員が無事に一日でも早く解放されることを願っています。ただ個人的に残念なのは、危険も伴う活動を相手国技術者と協力して行っている側面よりも、ことさら日本人のみの安全が報道される点です。国際化の時代ですから、海外では自分の安全は自分の責任という常識を自覚しつつ、同じ目的で共に行動している相手国や他国のスタッフの安全についても、もっと配慮されたり、語られたりすればいいのにと思います。

□日本では経済的な繁栄と共に出生率が下がり続け、21世紀以降、猛烈な高齢化社会を体験した後に、日本人は蒸発するのではとか言われていますね。住宅事情とか、子供が増えると可処分所得が減るとか、雇用や老後など、将来の生活不安とか、レベルこそ違え、家族や社会共同体の崩壊など、それぞれの個人に不安やストレスが蔓延しているように見えます。解決のプログラムがないように見えます。

●こうした活動を通じて思うのは「国際協力は、現在の日本を映す鏡」だということです。国際協力の問題も日本の問題も、いずれも「人間の新たなレベルの英知や賢明さ」が求められているように思えます。その時々、たまたま敗者とか弱者と呼ばれる人に、勝者や強者からの配慮がない「自助努力を否定するような社会」には、社会・自然環境と調和した持続的な発展は望めないのではないか、という思いがあります。今後の私のキャリアプランですが、ＪＩＣＡの人事は、約３年周期で国内と海外を回りますから、65歳で引退するまでにあと３回は海外に出たいですね。アフリカ人材の養成拠点構想の具体化に腰を据えて取り組みたい。５才の孫娘もあと10年もしたらアフリカまで来られるので、改善された状況を見せたいですね。国際機関や大学でもお役に立ちたい。最後に大切なこと。同窓生の皆さんと一緒にお仕事のできる機会を楽しみにしています。もう一つ、妻と２人の娘の家族協力が無ければ、今の私も無かったなと、また祖母や母親、孫娘２人にも本当に感謝しています。

［1999年10月23日　国際協力事業団　国際協力総合研修所にて］
編集委員　清水綾子［30期］　湯浅伸庸［18期］

●ＪＩＣＡホームページ　[http://www.jica.go.jp/Index-j.html]
中野連絡先　〒162-8433　国際協力総合研修所
TEL 03-3269-3851
E-mail　tnakano@jica.go.jp

ピッツバーグ留学の頃、恩師中居先生と

／／／／／／／／／会員からのメッセージ／／／／／／／

◇近況◇

◆宮原先生お元気ですか？わたしは毎日忙しいけれどがんばっていまーす。［Ｈ６　宮原ゼミ　伊藤直樹］◆大学時代お世話になった岸先生が、家から徒歩５分のところの東京経済大学マーケティング学科の教授として活躍しておられます。［Ｈ４　岸ゼミ　高橋径子］◆今年は行政書士の資格試験のため、欠席させていただきます。来年から税理士を受けようと思いますので、関係職の方の意見をお聞かせ願いたいと思っております。［Ｈ11　藤本ゼミ　水野誠］◆卒業して早いもので５年になります。今回の会報で、恩師多和田先生の退職を知り驚いています。何となく帰る場所を一つ失ったような寂しい気持ちになりました。新しくなったキャンパスを一度訪ねてみたいと思います。［Ｈ７　多和田ゼミ　高井（鈴木）千春］

◇転勤・転居◇

◆中日新聞東京本社に転勤しました。［Ｈ11　横田ゼミ鈴木啓介］◆地元の岐阜新聞社で15年間記者生活を送り、平成10年３月から岐阜米屋町郵便局長へトラバーユしました。［Ｓ58　内藤ゼミ　林則安］◆昨年12月に結婚し住所が変わりました。［Ｓ61　上村ゼミ　和田尚］◆卒業以来本年２月に再び滝子の地に戻ってきました。［Ｓ51木村ゼミ　松田賢治］◆福岡に永住することになりました。会社は福岡市内の天神です。［Ｓ44　静田ゼミ　田辺幹景］◆会社の異動により、転居しました。ＮＴＴ西日本本社（大阪）に勤務しています。［Ｓ63　西田ゼミ加藤英明］◆今年４月より郵船航空信州（株）に着任しております。諏訪湖畔のリゾート地にて仕事をやっております。［Ｓ57　神山ゼミ　種村秀実］◆Ｈ11年５月末（株）第一勧業銀行より関連会社（株）第一勧銀ハートサービス検査事業部へ転籍しました。［Ｓ46　松永ゼミ　前田敏明］◆今年の11月位に新居に移ります。［Ｓ50　岡崎ゼミ　佐藤克己］

◇会報◇

◆卒業後一度もキャンパスを訪れたことがありませんが、会報でその変化を知ることができ、もし行っても腰を抜かす事だけはなさそうです。［Ｈ３　梅津ゼミ　名和（長縄）ひとみ］◆遠方で催し物には参加できませんが、会報を読んで楽しませていただいてます。［Ｓ56　牛島ゼミ　加藤（牛田）朱美］◆日産プリンス浜松に転勤になり早３年。瑞山会報は楽しみに見ています。［Ｓ47　中居ゼミ　豊嶋日出男］

■　就職のための学生とＯＢ・ＯＧとの交流会開催　■

毎年恒例になりました「ＯＢ・ＯＧとの交流会（経済学部ゼミ協主催）」が今年も11月５日（金）に開催されました。この企画は、就職活動を間近に控えた３年生の皆さんに、社会で活躍する先輩方と懇談する機会を提供し、就職活動の応援ができればという企画です。当日は午後から大学事務主催のガイダンスが行われ、引続き夕方より学生会館和室での交流会開催でした。まだまだ、景気の先行きに明るさが見えず、大卒文系の求人倍率も0.83倍と昨年よりもさらに落ち込んでおり、学部の内定率も10月末で80%弱にとどまっているようです。来年も今年同様、厳しい就職戦線が予想されています。しかし、９月、10月頃から頻繁に就職ガイダンスを行う他の私大と比較すると、公立大学の就職指導はまだまだ不十分な部分が多く、学生の就職に対する意識も低いのが現状で、厳しい状況にもかかわらず参加学生は若干少な目でした。先輩方は、業務多忙の折りにもかかわらず、メーカー・商社・流通・エネルギーなど多業種にわたってお集まりいただき、参加された学生諸君よりの熱のこもった質問に、的確なアドバイスで応えていました。先輩からは、「参加した学生は就職に対する意識が高いね」という声も聞かれ、これからの就職活動にとってよい経験になったのではないかと思います。長期にわたる活動になりますが、この経験をいかしての頑張りに期待したいと思います。次回開催の折りにも多方面にわたる業種、職種の皆さんのご参加をいただければと思います。　　（20期生　中村英利）

{同窓会ホームページ}　http://www.asahi-net.or.jp/～ IW3K-KJM/zuizan.html

まもなく同窓会ホームページを開設して一年を迎えます。今年８月には構成を全面改訂、医学部同窓会ホームページとリンク、コンテンツ数も増えてきました。さらに「掲示板」を設置しましたので会員の皆さんの近況やゼミ、クラブなどのＯＢ会の連絡などに活用していただきたいと思います。その際には使用条件をよくお読みいただいてご利用いただくことをお願します。今後の計画としては会報バックナンバーをＪＰＥＧ画像ファイルから順次ＰＤＦデータへ電子書類化、御自宅でパソコンから印刷物と同じ品質で簡単にプリントアウトできるようにする作業を進めます。

皆さんの声によってコンテンツなどの充実がはかれますので、ご意見などお寄せください。
（ホームページ委員会　18期　服部　篤典　E-mail は atstique @rr .iij4u.or.jp まで）

瑞山会年間行事予定（平成12年）

４月　２日（日）　山崎川花見と茶会
　　中旬（土又は日）ＯＢゴルフコンペ
５月　３日（祝日）テニス大会（硬式）（山の畑キャンパスにて）
９月　３日（日）野外バーベキューの集い（山の畑キャンパスにて）
10月　中旬（土又は日）ＯＢゴルフコンペ

その他
夏（８月）通常総会（兼代議員会）
年間３～４回理事会
年２回（７月・12月）瑞山会報発行

［行事の日程等は変更することがありますのでその都度ご確認ください］